

(4) 研修内容

ア 鹿児島県訪問

(a) 実施日

令和3年11月10日(水)～11月13日(土)

(b) 内容

① 鹿児島県和泊町役場にて「みへでいるプロジェクト」に参加

日時：令和3年11月10日(木) 15:00～18:00

場所：鹿児島県和泊町役場会議室

みへでいる(ありがとう)プロジェクトは、和泊町の総合振興計画の1つで、島の自然の恵みに感謝をしながら資源を有効活用し、農林水産業の活性化を図り次世代へつなぐ生業へと進化させるプロジェクトである。地産地消することで、輸送コストを抑えることができ、低炭素化にもつながり、農業祭、みへでいる市、軽トラ市等のイベントを実施することで産業化される。そのために、島内で家庭菜園の普及推進、作りすぎた野菜について未利用施設を活用し、イベント実施を行っている。

プロジェクトの概要説明を受けた後、自由な発言の時間をいただいた。災害に対する島の課題(台風が続くとライフラインが止まる等)を学ぶとともに、生徒からは未利用資源の活用について、大量に作られ廃棄されている島みかんを入浴剤や制汗剤に使ってみてはどうか、健康と美容に良いみかんを乾燥させて、オレンジティーにしてみてもどうか、島バナナも乾燥させて、バナナチップスにしてみてもどうか、など積極的な発言がみられた。その発言に対し、採用できるかを真剣に検討していただき、島バナナについては早速試作品づくりまで進めていただいた。また、同じ会議に参加していた沖永良部高校2年生4名の生徒とも交流することができた。

(生徒の感想)

- ・1番印象に残っているのは島の人たちの島に対する思い。こういった会議では伊勢でも行われているかもしれないが、実際に参加してみて、良い案があれば、高校生の意見でも実際に取り込もうとしていることに島に住む人たちのことを考え、より良い島にしたいという姿勢を感じた。
- ・自分なりの想いを伝えることの大切さを知りました。自分が思っていなかった反応やほかの人の意見を取り入れることでより良いものになっていくことを感じたからです。それが地域のためになっていくと感じました。

② oldie-village (オールディヴィレッジ) による自然体験

日時：令和3年11月11日(金) 8:00～18:00

場所：沖永良部島全域

oldie-villageの古村英次郎代表のガイドで以下の場所を見学・体験させていただいた。

西郷南洲記念館 → 日本一のガジュマル → フーチャ(潮吹き洞窟) →

ワンジョビーチ → 昼食 → 世の主の墓 → 昇竜洞 → 田皆岬 → 住吉海岸

西郷南洲記念館では、西郷隆盛が沖永良部島で過ごした日々について、世の主の墓では琉球王国時代の琉球式の墓を知り、沖永良部島の『歴史』を学ぶことができた。100年以上前に植えられた新日本名木百選のガジュマル、ウミガメに遭遇した潮吹き洞窟フーチャ、鹿児島県天然記念物に指定されている鍾乳洞の昇竜洞、田皆岬の絶壁からみる海、忘れることのない夕陽を見学した住吉海岸では、『自然』の壮大さを目の当たりした。また、今回は体験することはなかったが、島ではケイビング(洞窟探検)が盛んであり、200箇所以上の洞窟があることを知った。一方ワンジョビーチでは、プラスチックゴミについての話を聴かせていただき、このまま何もしなければ2050年には海の生物よりもゴミの方が多くなるとの話は衝撃的だった。中には海外から流れてきたとみられるペットボトルもあり、島の海岸によってもゴミの量に差があることを知った。これらのことから、この美しい環境や自然を維持することの大切さ、サステナブルツーリズム推進を考える貴重な機会となった。

(生徒の感想)

- ・西郷南洲記念館では館長さんから西郷隆盛が沖永良部島に島流しにあり、吹きさらしの牢屋に入れられていたことを知った。実際に再現された牢屋に入ってみると、雨風や寒さ、暑さをしのぐことのできない場所だった。ここで過ごしていた西郷隆盛の忍耐強さが垣間見えた気がした。国頭小学校のガジュマルは迫力がとてもあった。中心ある大



↓海外から流れてきたペットボトル





きな幹から枝が広がり、気根という幹や茎から生える根によって、細い幹が沢山できていた。初めはゴボウのような根でも絡み合い1つの幹になる生命力がすごいと思った。

・沖永良部島がサンゴ礁でできている島で、伊勢志摩と違って観るものすべてが新鮮だった。西郷南洲記念館で西郷隆盛が沖永良部と関係があったことを知った。

自然にできたフーチャや昇竜洞では人工的に作られたのではないかと思うくらい迫力があつた。特にフーチャはサンゴ礁の島ならではのもので、伊勢志摩では見ることができないので良い思い出になった。さらに、今話題となっている軽石も実際にさわって、軽石問題を聞かせてもらい、今しかできない話を聞かせてもらえて良かった。この日は環境について考える良い機会となった。

↓ 漂流した軽石



③ 鹿児島県和泊町役場にて「むうるほうらしゃプロジェクト」に参加

日時：令和3年11月12日（金）9：00～11：00

場所：鹿児島県和泊町役場会議室

むうるほうらしゃ（みんな喜ぶ）プロジェクトは、自転車専用レーンなどの交通環境づくりを行うとともに自転車活用を推進することで、町民の運動不足解消、自転車関連事業を新たに生むことで、雇用や移住者を増やし、人口増加につなげるプロジェクトである。またサイクリング大会、ロードレース大会を実施し、町民の趣味、楽しみを増やすことや自転車利用促進により自動車利用が減ることで温室効果ガス削減効果を高めるねらいがある。課題は、町民は少しの距離も自動車活用を選ぶ事が多く、自転車購入の補助金制度を令和2年度に行うも、未だ浸透しているとはいえない。今後は電動アシスト付き自転車リース事業を提案する予定。

生徒は、自転車利用者をどう増加させていくかについて、交通公園を作成して、小さい子ども連れ家族が楽しく交通ルールを覚えるのはどうか、BMX等若者受けが良いものを活用し、パークを作成してはどうか、自転車利用中にほっと一息できる喫茶店やベンチがあると良いのでは等、多くのアイデアがでた。

その後、行政の方々のガイドにより、バナナ農園、じゃがいも加工、シイタケ栽培場、魚市場の見学をさせていただいた。バナナ農園では無農薬にこだわり、農薬による海の汚染を危惧されていた。魚市場ではソデイカ10kgの巨大イカをみせていただいた。特殊冷風乾燥機で干物にする技術も興味深いものであった。食品加工場では初日に提案した島バナナチップスの試作品が出来上がっており、濃厚な味のバナナチップスに提案した生徒も感激した。



(生徒の感想)

・島民の人たちの移動方法を自動車から自転車に変えることを中心に様々なことを考えました。観光客向けには自転車での観光を促進することはイベント開催などでできそうに感じましたが、島民の移動手段を自転車に変えていくのは、沖永良部島は坂も多いので、難しく感じました。会議後にじゃがいも加工場で島バナナのバナナチップスを作ってくれたことがすごく嬉しかったです。食べてみると味が濃く、酸味のある島バナナは従来のチップスより少しねっとりした感じが残って美味しかったです。



↑ 生徒が提案した『島バナナチップス』

・交通手段について考えが改まりました。例えば、高校生がバイク通学という私たちからしたらいいなあって感じます。しかし、健康のためにもその移動手段を少しでも変えていく必要があることに気づきました。土地のことや移動距離など様々な問題点があり、考えや解決策があっても実行する難しさを感じました。その後、役場の方に様々な場所を案内していただきました。より地域に深くかかわっている役場の方のお話は本当に面白く、自分とは違う視点ばかりで沢山の気づきがありました。

④ 島内サイクリング

日時：令和3年11月12日（金）14：00～16：00

場所：鹿児島県和泊町近辺

「むうるほうらしゃプロジェクト」における自転車推進を実行し、役場の方に報告を行った。宿泊地にてロードバイクをレンタルし、フーチャ（潮吹き洞窟）まで往復13kmの距離をサイクリングした。自動車での移動とは違い、風や潮が肌に触れる感触や、





土地の匂い、道々で出会う方に挨拶をすると返ってくる人の温かさを感じることができた。一方、段差を慣れないロードバイクで運転することは、やや危険に感じる場面もあった。「自転車でのまちづくり」については、花が道路わきにあると気持ち良かったことからもっと「インスタ映えスポット」があると良いのでは、サイクリングコースを作成し、駐輪場や休憩所も作ると良いのでは、等の意見がでた。

(生徒の感想)

・どこを観ても自然だらけで楽しかった。道路の周りに花をさかせて並木道にしたり、バナナの木で道を作ると面白いのではないかと思います。海沿いの道路に長い草が生えているとせっかくのきれいな海が見えにくいところがあったので、サイクリングコースを作るときは、景色がよく見える工夫が必要と思いました。

・島民の人たちに自転車を推進するのではあれば、自転車で訪れた人にだけ使える割引制度や健康促進のためのパンフレットがあると良いと思いました。

↑役場の方からサイクリングを経験してのアンケート協力いただいた。

(内容)

- ・島を自転車で周った感想
- ・良かった観光地は？
- ・自転車だから気づいたことは？
- ・良かった点、悪かった点
- ・自転車まちづくりに意見・アイデアを

### ⑤ 鹿児島県立沖永良部高等学校との交流

日時：令和3年11月12日(金) 16:30~19:00

場所：鹿児島県立沖永良部高等学校

文化祭のインターハイと呼ばれる全国高等学校文化祭に5年連続出場しているエイサー部の生徒たちと交流を行った。大会で披露した演舞を見学させていただき、その後一緒に踊りに参加させていただいた。生徒たちは、同じ高校生でありながら積極的にコミュニケーションをとる沖永良部高校の生徒に刺激を受けたようであった。

また、沖永良部高校の生徒たちに島の魅力を聞くと、「きれいな海」、「リラックスできる場所」などがあげられたが、ほとんどの生徒が、卒業後は島を一度出たいと考えているとのことだった。このことについては、沖永良部高校の久保教諭や前日お世話になったガイドの古村さんや役場の方ともに、「もっと大人が子どもに島の魅力を伝えられれば、進学や就職で島を離れても島に戻ろうと思うのではないか」、「島外から戻ってきたいと思ったときに、島に十分な仕事があることが大事」と語られていた。



(生徒の感想)

・沖永良部高校のエイサー部を見学させていただきました。エイサーを初めて観ましたがとても迫力があって、ただただ圧倒されました。太鼓と音楽のリズムにのせて全員が動きを合わせることがすごいと思いました。一緒に踊りも参加させていただいて、そのあと話をしていると、「島外にでたい」と思う子がほとんどでした。理由は様々だったが、島には働く場所が少ないという意見が印象的だった。

### ⑥ 沖永良部島研修全体を振り返って(生徒の感想)

・沖永良部島の研修に参加して沢山のことを学ぶことができた。研修に参加する前までは「未利用資源って何?」、「軽石って大変なことなの?」、「離島と本土の暮らしの違いって?」と自分とは関係のない問題でないと考えていた。しかし、この研修に参加したことで、廃棄されているものを有効活用することで誰かの役に立つものに生まれ変わることができること、軽石問題も何もしないでただ放っておいても解決にならない。離島での生活では台風等の災害はライフラインも危うくなる大きな問題であり、地産地消はそれを解決する糸口になることなど今回経験したことや考え方を今後に活かしたいと思った。



・参加して、地元の活動にもっと参加しようと思います。私の住んでいるところには、近くに海もあるし、山もあります。ゴミ拾いなどの活動もきっとあると思います。そこに参加し地元の問題に今一度向き合いたいと思います。

・島ならではの島の人たちの温かさをとても感じました。人の良さ、自然の良さを維持することは決して簡単な事ではないとい



うことを学びました。環境を守っていくために様々な人が関わって、いろいろなアイデアを出して、それが1つでも実践されればと思いました。

イ J A伊勢 大紀町牛舎訪問

(a) 実施日

令和4年1月5日(水)

(b) 内容

未利用資源活用について、地元伊勢ではどのような取り組みがあるかを知るため、松阪牛の中でも大紀町の七保地区で育てられるブランド牛「七保牛」を育てておられる岡田一彦さんの牛舎を訪問した。牛舎を見学していると思った以上に臭いがないことや清潔感があることを感じる事ができた。ブランド牛の飼育の仕方などを聞き、体験することは地元色を感じる事ができグリーンツーリズムになるのではないかと感じた。牛糞堆肥について、牛の糞を発酵させて微生物によって分解される有機質肥料について説明をいただいた。土壌を改良する目的として利用されることが多く、土の中の繊維質を増やすことから、腐葉土の代わりとして土作りに用いられることが多いことを知った。その後、牛舎堆肥場へ移動し実際に機械を動かしてもらい、堆肥に変わる様子を見学させていただいた。J A伊勢の取り組みや後継者不足が今後の課題であることを教えていただいた。まずは、多くの人にこのような活動を知ってもらい興味をもってもらうことが大切であると感じた。



(生徒の感想)

牛舎見学をさせていただいて、実際に行ってみるということが大切だと感じました。後継者の問題もあるということから、若い世代の人達に見学する機会をつくり、興味や関心を持ってもらうことが必要だと思いました。私も実際に行ってみると印象が変わりました。その体験を多くの人ができるようになるといいなと思います。



↑ 牛舎堆肥場

また、牛の糞のように廃棄されてしまうものについて手を加えることで堆肥にしていることを知りました。このようにいらぬから捨てるのではなく、何かに生まれ変わる事で違う事に使う事が出来ると学びました。その循環が環境にも優しいということに繋がるのではないのかと感じました。

ウ 伊勢市役所訪問

(a) 実施日

令和4年1月6日(木)

(b) 内容

地元伊勢の観光、防災、インバウンドについて教えていただいた。最初に防災について、津波ハザードマップで近年の災害時のことや備蓄についてお聞きし、その対応について教えていただいた。また伊勢の観光について、1日5万人以上の観光客だと渋滞等のオーバーツーリズムになることもあり、程よい観光客が持続可能であることを知ることができ、それはインバウンド産業においても同様であることを教えていただいた。沖永良部島で行政の方との会議に参加させていただいたが、地元伊勢市のビジョンや考え方を直にお聞きすることができ、より地域課題を自分事のように考えることができるようになった。



(生徒の感想)

市役所さんでは防災のことなどを詳しく学びました。近い未来予想されている南海トラフの津波ハザードマップを見せていただきました。想像以上に津波の被害は大きくでるということを知りました。津波だけではなく、大雨の時の川の氾濫の危険もたくさんありました。危険に対する対策も多くありました。しかし、それだけでは補えない可能性もあることを知りました。理由の一つとして、伊勢市は観光地であるということがあげられます。観光客の方の事も想定しつつ、災害対策を行うことはとても難しいです。備蓄にも限度があり、想定されている避難者数には到底及ばない所もありました。ひとりひとりが災害でおこる危険を知るだけではなく、準備をすることが必要だと学びました。

他にも沖永良部島でも話にあった、オーバーツーリズムについては伊勢でも同じことが考えられるそうです。観光客がたくさん来ることはいい事のように思えますが、限度を超えるとそうではないと知りました。1箇所に集中するのではなく、その周りに目を向けて貰えるような魅力あるまちづくりを考えて行かなければならないと思いました。

(5) 研修全体を振り返って (成果と課題)

まず、今回の研修において、当研修の準備から実施に至るまで大変お世話になった東北大学環境科学研究科助手の三橋正枝先生から沖永良部島のことや地元 (伊勢志摩) の課題について話していただくことがあり、島民目線での話や本土からみた目線など広い視野で物事をみることを教わった。



文科省事業最終年度にあたり、コロナウイルス感染拡大の影響で、当初の予定 (国外研修) を変更し、行った国内研修であったが、全ての研修が無事終わることができた。沖永良部班としては、目的である『SDGs の理念に基づいた、自然資源を生かしたグリーンツーリズムなどを利用し、地方創生を目指した取り組みを学ぶ』について、SDGs の理念から未利用資源活用について考え、沖永良部島の自然にふれ、地元の方、行政の方とふれあう機会を持たせていただき、共に地方創生について考えることもできたことから非常に学び多き研修ができて良かった。

また、沖永良部島研修を終えた後、地元に対する意識も変わり、伊勢市役所や J A 伊勢に取材を申し込み、地元の取り組みや地元の課題を学ぶ事もできた。そのことで、より一層地域課題について深く考える良い機会となった。

今後の課題は、この学びをどのように生かし、後輩につないでいくかではないか。まずは、参加した生徒は来年度 (3 年生) 様々な場面でこの学びを学校全体に広げてもらうことを期待したい。

#### 4 D コース

(1) 参加生徒

2 年 4 組情報処理科	浦田奈波	2 年 4 組情報処理科	山本妃星々
2 年 4 組情報処理科	橋本美音	2 年 5 組国際科	櫻井美晴

(2) 研究テーマ

「農業と SDGs」

(3) 目的

第一次産業 (農業) を中心とした SDGs の達成に向けた取組の国内先進事例を学ぶとともに、オーガニック食材を利用した調理体験等を通し、自然との関わりを学ぶ。

(4) 研修内容

ア オンライン講義

(a) 実施日

令和 3 年 10 月 27 日 (水)

(b) 内容

オンライン (ZOOM) にて、有機栽培の専門家で農林水産省 6 次産業化プランナーをされている (株) プラスリジョン代表取締役の福井佑実子さんに、第一次産業 (農業) を中心とした SDGs の達成に向けた取組やオーガニック食材と自然との関わりについて講義をしていただいた。



オンライン講義の様子

イ 丹波研修

(a) 実施日

令和 3 年 11 月 22 日 (月) ~ 23 日 (火)

(b) 研修先

- ・ (株) プラスリジョン (兵庫県丹波市柏原町)
- ・ 橋本有機農園 (兵庫県丹波市市島町 1)
- ・ 婦木農場 (兵庫県丹波市春日町)



(c) 内容

① (株) プラスリジョン ORGANIC HOUSE 訪問

代表取締役の福井さんと 10 月 29 日に実施していただいたオンライン講義について振り返りを行い、その後、今回の研修についてレクチャーを受けた。また、丹波市で育てている有機野菜で作った昼食を食べ、卵の臭みが苦手な人もこれなら食べることができるのではないかと、という発見があった。

② 橋本有機農園 見学

市島町で有機複合農業を実践している橋本有機農園を見学した。市島町は、町の入口に『有機の里 市島』という看



多品目栽培の畑

板があり、町として有機農業を推進している地域である。雨天であったため、畑や鶏舎を一通り見学した後、橋本さん宅で持続可能な農業に向けた取組について講義を受けた。

③ 婦木農場 見学・体験

婦木農場は江戸時代から代々続く

農家で、『今、農村はおもしろい!』のキャッチフレーズで、家族で農業を営んでいる。また、農家体験施設「○(まる)」を運営する等、農法だけでなくそれを知らしめる活動も行っている。感染症対策のため、牛舎や鶏舎は入ることができなかったが、畑やビニールハウスを見学し、婦木さんから有機農業について話を伺った。

また、婦木農場では飼育しているジャージー牛の乳を使ってチーズを製造している。今回、チーズについて話を伺った後、モッツァレラチーズ作りの体験をした。農場のチーズ工房で製造しているチーズはインターネットで販売しているので、このモッツァレラチーズ作りの材料を、手作りキットとして同様に販売してはどうか、と提案してみた。しかし、ただ作るだけでなく、製法などを直接説明することまでがこの商品である、という生産者の思いを聞いた。そこで、購入者にはweb上で説明動画が見られるようにしてはどうか、と提案してみた。

その後、婦木農場で作られた有機野菜などを用いて、昼食作りをした。メニューは黒豆のちらし寿司、野菜のかきあげ、コールスローサラダ、豚汁だった。婦木さんに教えてもらいながら自分たちで調理を行った。



農家体験施設 ○



チーズ作り体験

(d) 参加生徒の声

・この研修を通して、毎日美味しいご飯を食べることができるのは当たり前ではないことを実感したし、私たちにお肉を食べさせてくれている動物や農家の方への感謝を忘れてはいけないと思った。その他に、日本人は見た目を重視するからスーパーに並んでいる形の綺麗な野菜を見ても不思議に思わないけど、そういう風を感じていることがおかしいのだと橋本さんが話されていたのが印象に残った。「人間と同じように野菜もそれぞれ違って当たり前」という考え方が素敵だと感じた。有機農業のことを調べてもっと広まってほしいという気持ちが強くなった。

・特に印象に残っているのが、出会えた人みんなが口を揃えて「なければつくればいい」「やりたいならやればいい」と言っていたことです。今自分は何ができるのか、これからこの経験をいかしてどんなことがしたいのかと色々な事を改めて考えることができました。

ウ J A伊勢見学

(a) 実施日

令和3年12月15日(水)

(b) 見学先

- ・藤原牧場(伊勢市小俣町明野)
- ・あぐりん伊勢(伊勢市小俣町明野)

(c) 内容

地元の農業を知るために、伊勢市の藤原牧場と、あぐりん伊勢のイチゴハウスを見学した。畜産業の話を知り、「命をいただくことに感謝する」ことが大切だと感じた。また農業では、ルールを守って農薬登録されたものを使用することで「安心・安全」を考えていると知った。



藤原牧場にて



あぐりん伊勢にて

(d) 参加生徒の声

・丹波研修を終えた後は、有機農業が1番よくて、全ての農業が有機農業になればいいのと思っていたけど、農薬を使わなければ虫に食べられて商品として扱えないという話を伺い、何が正しいことでどれが駄目な事なのか分からなくなった。でも、農薬を使っても使っていないなくても、農業と真剣に向き合い、命を大切に、野菜を大切にしている事は確かだった。

・「生産者<消費者」となっているのが問題だと言っていた事が気になった。イコールにするためには、どうすれば良いか考えていきたい。

(5) 成果と課題

この研修で、有機農業発祥の地と言われる丹波市で循環型農業を学ぶだけでなく、地元伊勢で行われている農業も見聞することによって、様々な物の見方や考え方について学ぶことができた。参加生徒は、次年度の探究活動において、どのテーマでどのように取り組みたいか、明確な目標ができたようである。



懇談会の様子(3年生)

また、丹波研修は昨年に引き続き2回目の実施であった。昨年度の参加生徒は、今年になり商業科目「課題研究」や「ビジネス情報管理」において、研修で学んだことを生かして探究活動に取り組んだ。今年の研修を行う前に、昨年度と今年度の研修参加者による懇談会を実施し、先輩から後輩へと研修内容を引き継いだ。



懇談会の様子(2年生)

このことから、現地に赴き様々な人と出会い体験学習を行うことで視野が広がり、探究活動における深い学びに繋がると考える。また、先輩から後輩へ学びや知識の伝達をすることで校内における学びの循環が生まれる。今後も、地域社会と連携した教育実践を行うとともに、学年間交流の機会を設け、持続可能な教育活動となるよう継続実施していきたい。

## 5 V I S O N 研修

(1) 参加者

生徒18名(2年生10名、1年生8名) 教員 7名

(2) 目的

SDGs推進を核として地域経済の活性化を目指す商業リゾート施設「V I S O N」を見学し、SDGsへの様々な取組事例を学ぶとともに、地域課題を解決するための官民連携によるスーパーシティ特区構想について学ぶ。

(3) 研修内容

ア 実施日

令和3年12月22日(水)

イ 内容

ヴィソン多気株式会社広報・WEB部課長の河中様に、V I S O Nの概要について講義いただいた後、施設内を案内していただいた。V I S O NのSDGsは概ね次のとおりである。



・食品ロスをゼロにする取組として、施設内のレストランでは地域で収穫される形の悪い作物を使用し、鮮魚売り場で売れ残った魚や野菜売り場で余った食材はすべてマルシェ内の食堂などで活用する。

・いずれの施設も木材を多用した建築とすることで、伊勢神宮などの式年遷宮のように定期的な作り替えを実施し、林業を継続した産業として確保する。

・ペットボトルやプラスチックをなるべく使わないようにするため、自動販売機を設置せず、浄水器を活用した給水ポイントを施設全体で採用している。

・V I S O Nに集まる有名シェフとのコラボレーションによるブランド化で地域の産物の価値を向上させる。

・国内外の上場企業や有名デザイナーが出店することで、魅力ある雇用機会を創出し、その結果、若年層の地元へのUターンや移住の増加を見込んでいる。



手書きの豆知識を添えて販売



給水ポイント

#### ウ 参加生徒の声

・最も印象に残ったのは雨の風景化のお話です。「雨の日を楽しく」したいという思いから、あえて屋根に雨どいをつけないことで、雨が流れる様子を風景とする工夫がされていました。普通だったらマイナスに考えてしまうような雨を、風景化することでプラスに変えるアイデアがすごいと思いました。他にも、ふぞろいの野菜をジュースにしてお客様に提供する、売れ残りそうな食材をレストラン内で買い取って調理し提供するなど廃棄せずに済むように工夫されていて、SDGsの取り組みに積極的だという印象を受けました。持続可能な仕組みを考える上で、今回学んだこと、アイデアを活かしていこうと思いました。(2年生)



「雨どい」のない屋根

・私が今回の研修で学んだことや気付いたことは2つあります。1つ目は、「VISONとSDGsとの関わり方」についてです。お話をお聞きしていく中で、魚屋では延縄漁で取られた鯖のみを販売する・木材を多用して林業活性化に貢献する・施設を建設することで雇用機会を創出する・自動販売機を置かずに給水スポットに変更しペットボトルが出ないようにする、など環境に関する沢山の工夫がされており「そのような取り組みが出来るんだな、環境とはこのように関われるんだな」と感じ勉強になりました。環境と商業施設とを調和することは可能なのかと疑問に思っていたので、実際にこのような取り組みを学び知ることができとても感動しました。2つ目は、「VISONの方々は自然や地元をととても大切にしている」ということです。チョコレートやデザートを作る為のカカオやいちごは実際に栽培を行う事で地産地消に関わる・地元の野菜を販売する・屋根に工夫を凝らし雨を風景化をする等、観光客の方が訪問しただけで沢山の自然と触れ合えることができる素晴らしい現状を創り出しているのは、VISONの方々の志がある故なんだなと思いました。今回詳しくお話を聞いたことにより、VISONは地元の企業・地元の人や環境の為に何が出来るかを考えて数々の取り組みを実行しているということが分かり、なんて素晴らしい施設なんだろうと感じました。学んだ上での施設見学はプライベートで行った時よりも一層楽しく、景色が違って見えました。改めてSDGsに関して自分に何が出来るのかを考える良いきっかけとなりました。今回学んだ貴重な体験を無駄にせず、周りの人達に共有したいです。(1年生)



日替わり海鮮丼



イチゴハウス

#### (4) 成果と課題

この研修で、「三重故郷創生プロジェクト」(株式会社アクアイグニス、イオンタウン株式会社、ファーストブラザーズ株式会社、ロート製薬株式会社の4社からなる合同会社)による商業リゾート施設VISONを見学し、「すべてはいのちを喜ばせるために」をテーマに掲げた伝統と革新を融合させる新しい地域経済の活性化を目指す姿を学んだ。地域にある要素は何か、それをどのように活かしていくのか、SDGsの視点で創造された「村」がこのVISONであった。今後はこの学びを伊勢志摩地域に置き換え、地域課題解決に向けた探究活動につなげたい。



## 第7節 成果発表に係る活動

### 1 全国高等学校グローバル探究オンライン発表会

昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症の影響により、文部科学省指定グローバル型地域協働推進校探究成果発表委員会主催のオンライン発表会が開催された。グローバル型地域協働推進校の生徒が日頃取り組んでいる「グローバルな視点をもって地域課題の解決に挑む提言や実践」を日本語や英語で発表・共有する場を設け、ふだん直接交流する機会が少ない全国の高校生が一堂に会して新たな気付きを得たり、ネットワークを構築したりして、今後のグローバル探究の深化や意欲の向上を図ることを目的とし、本校からは英語部門と日本語部門に参加した。

日程	発表動画提出	令和3年12月20日～令和4年1月7日
	動画視聴・投票	令和4年1月8日～14日
	オンライン発表会	令和4年1月29日 (ZOOMにて)
		・自校取組紹介(1分間紹介リレー)
		・ブレイクアウトセッション
		・講評



#### (1) 英語部門

##### ア 参加生徒

- 2年3組商業科 中村 心美
- 2年4組情報処理科 佐々木 佑華
- 2年5組国際科 小坂 晴南
- 2年5組国際科 濱口 えま

##### イ 取組

国内研修のAコース(宮城県修)の生徒4名で、英語部門への参加を決定した。参加した生徒4名のうち2名は英語を専門的に学習している国際科に所属しているが、他の2名はそれぞれ商業科および情報処理科に属している。従って、英語での発表は容易ではなかったが、全員で何度も練習を重ね、準備を進めた。

オンラインでの発表会ということで、各チームが1月7日(金)までに10分以内の発表動画を作成し、提出するということがあった。部活動等で全員が一斉にそろって作業をすることはなかなかできなかったが、それぞれができることを考え、可能な生徒は冬休み中に登校し、パワーポイントでの発表資料を作成し、英語の原稿を仕上げた。準備と練習には多くの時間を要したが、何とか冬休み中に作業を終え、発表動画を完成することが出来た。発表の内容としては、Aコースの生徒が国内研修で12月末までに行なった宮城県訪問とスウェーデンからのオンライン講義の内容を主に扱うこととした。

##### ウ 発表資料

##### (a) パワーポイント資料



7

*What We Have Learned is the importance of...*

- ✓ Sense of Ownership
- ✓ Sense of Commitment

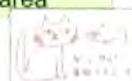
10



8

*What We Will Do is...*

- ✓ To actively participate in a group aiming to revitalize the Ise & Shima area



11



9



*Thank you for Listening!*

*Let's Coexist with Nature!*



12

(b) 英文原稿

Hello everyone! We are from Mie Prefectural Ujiyamada Commercial High School. I am Haruna Kosaka. I am Yuka Sasaki. I am Ema Hamaguchi. And I am Kokomi Nakamura. Today, we are going to talk about “Resurgence and Green Recovery from the perspective of SDGs”.

Our school has been doing a research project on the theme of “Tourist City- Ise- How to revitalize the city from the perspective of SDGs.” We had four different field trip destinations this year. Two teams went to Aomori and Okinoerabu Island of Kagoshima respectively to learn about eco-tourism and how to revitalize the local cities. Another team went to Hyogo in order to learn about organic cultivation. The other team, which is us, went to Miyagi to study Resurgence and Green Recovery from the perspective of SDGs from August 1st to 3rd.

We have three aims for our research.

1. To obtain knowledge about resurgence and green recovery, and to learn the significance of them,
2. To communicate with students from overseas as well as local students in another prefecture in order to broaden our horizons and to cultivate our willingness to actively participate in society,
3. To learn how a town that was devastated by a tsunami caused by the Great East Japan Earthquake learned from the experience and how they are preparing for the next one.

First, we visited Tohoku University, one of the leading institutions in Japan in the study of SDGs. We took some lectures from professors and gained knowledge on the current environmental problems that not only Japan but the whole world is facing. We learned how some of the European countries have been addressing these issues, too. As many of you know, Miyagi suffered from a serious damage from the Great East Japan Earthquake. We were also able to learn how some cities in Miyagi had been reconstructed in eco-friendly manners so that these cities could be sustainable.

Next, we had an opportunity to meet international university students studying in the Graduate School of Environmental Studies at Tohoku University. We talked with four university students from Indonesia, Bangladesh, Vietnam, and China. They all had a passion to study about environmental issues. They were all highly motivated to do what they can for the environment and to contribute to solving these problems in the future when they go back to their home countries after finishing their graduate courses. Talking with these international students that are willing to contribute to society was stimulating and inspiring for us.

We also met Japanese high school students from Ishinomaki Nishi High School, Miyagi. Ishinomaki Nishi High School is also one of the designated schools of the MEXT project just like our school. We had a chance to talk about each other’s research projects. We were amazed by their autonomous attitudes towards their research. They find problems, come up with ways to deepen their understanding, contact third parties to gain more knowledge about the issues, and try to find solutions. They do all of this without help from teachers. Meeting with these people definitely encouraged us to take an autonomous approach in our research project.

In 2011, the Great East Japan Earthquake hit the Tohoku area and more than 15,000 people were killed. Miyagi is one of the prefectures that suffered from severe damage from the earthquake and tsunamis. We visited a memorial museum and were guided by a university student. She experienced the Great East Japan Earthquake when she was in elementary school. All the things we heard from her were surreal. After the museum, we visited a huge emergency supplies warehouse. It was built in the aftermath of the Great East Japan Earthquake in order to be better prepared for a possible future disaster. The population of Higashimatsushima-city is 40,000. It is estimated that 70 percent of them have a “disaster prevention bag” at home. Therefore, all the food, water, goods, and tools needed for three days for the other 30 percent, which is 12,000 people in Higashimatsushima-city, are stored in the warehouse. In the warehouse, all the things were beautifully arranged and placed in case of emergency.

On December 20th, we had a chance to listen to a Japanese person who lives in Sweden. Her name is Ms. Unger Kumiko. She is married to her Swedish husband with two children, and has lived there since 2016. Sweden is ranked number one in the Sustainable Development Report. Through the online lecture with Ms. Unger, we learned the differences between Japan’s approach and Sweden’s approach toward realizing the SDGs. Ms. Unger told us that people in Sweden have more of a sense of commitment toward realizing the SDGs than Japanese people. She said that Swedish people always think about “What I, as an individual, can do” to contribute to society.

Now we are going to wrap up. We visited Miyagi in summer, and had an online lecture from Sweden in December. What we learned from our research project is the importance of ① a sense of ownership and ② a sense of commitment. We often hear many people saying “SDGs are important,” but in reality how many of these people think that environmental problems are closely related to them? Without constant reminders, people easily forget about these issues. Each one of us has to realize these problems belong to us, not to the next generations. What we can do from now on is to think about “what I, as an individual, can do to contribute to our society and the earth”.

What we, all four of us, will do is to actively participate in a group aiming to revitalize the Ise and Shima area by utilizing unused resources. The group is led by Ms. Masae Mitsuhashi, who is a graduate from our high school and now works at Tohoku University. We are not telling you to do things just like we do, but please try to think about something you can do to help the environment.

Let’s coexist with our beautiful nature. Thank you for listening.

(2) 日本語部門

ア 参加生徒

2年4組情報処理科	浦田 奈波	2年4組情報処理科	橋本 美音
2年4組情報処理科	山本 妃星々	2年5組国際科	櫻井 美晴

イ 取組

研修Dコース生徒4名が日本語部門に参加することになった。発表タイトルは「オーガニックとSDGs ～好きな食べ物を食べ続けるために～」とし、丹波研修での体験やJA伊勢で学んだことをまとめて10分間の動画に収めた。

ウ 発表資料

(a) パワーポイント資料





(b) 原稿

わたしたちは有機農業とSDGsについて発表していきます。

まずこのスライドを見てください。みなさんはスーパーで虫がかじったりんごときれいなりんご、どちらを買いますか？多くの方はきれいなりんごを買うと思います。では、言葉を変えて、虫が寄り付かず食べると死んでしまうりんごまたは、虫が食べても安全なりんごどちらを買いますか？わたしたちは兵庫県丹波市に行つて、農泊を体験し意識を大きく変えることになりました。私たちはSDGsの17の目標のうち、2番の「飢餓をゼロに」と12番の「つくる責任、つかう責任」を中心に学んできました。それでは丹波市で学んだことを話していきます。

丹波市へ着いてから、株式会社プラスリジョン内にあるオーガニックハウスへお邪魔しました。オーガニック野菜を使った料理、平飼いされている鶏の卵を使った、おいしさを存分に活かした料理をいただきました。次に私たちは、橋本有機農園と鶏舎に伺いました。最初に有機農業の畑を見学しましたが、私の想像していた畑とは違い沢山の種類の雑草が放置されておりほとんど野菜と雑草の区切りがありませんでした。疑問に思いお話を伺うと「雑草の種類が多いほど栄養が土壌に蓄えられていて良い畑であるという証拠」ということを教えて頂きました。畑では様々な種類の旬の野菜が育てられていたため、同じ種類の野菜をきれいな状態で育てるという考え方が大きく変わりました。鶏は平飼いされており、ストレスフリーな環境

で温厚に暮らしていました。橋本有機農園の見学を終えた後、婦木農場へ行き、宿泊施設で一泊させて頂きました。婦木農場でも有機農業をしており、新鮮で美味しいオーガニック野菜と、平飼いされている鶏の新鮮な卵を使い昼食をつくりました。そのあと、有機農業をしている畑を見学させて頂きました。そこで橋本有機農園でみた畑と同様に同じ野菜が沢山育てられているのではなく、色々な種類の旬の野菜が育てられていました。また、婦木農場で育てられているジャージー牛の牛乳を使って作られたナチュラルチーズをもとにモッツァレラチーズ作り体験をさせていただきました。

研修から帰ってきた私たちは、地元で農薬を使用している農業と畜産をされている方にお話を伺いました。まず、伊勢市にある藤原牧場を訪れました。想像していたより、牛一頭当たりの牛小屋のスペースが広く、牛の過ごしやすい環境が作られていると感じました。動物福祉についてどう考えているかという質問に、「牛のことはペットではなく経済動物であり、それが商売でもあるから機械化してしまう」と教えてくださいました。それを聞き、消費者が「命をいただくことに感謝する」、「残さずに食べる」ということが大切だと考えました。次に、農薬を使用し、いちごを栽培されているあぐりん伊勢を訪れました。そこで、農薬登録されているものを使い、使用ルールを守ることで「安心・安全」は守られるということ学びました。

研修を通して主にこの3つのことを学びました。1つ目は「野菜にも個性がある」ということです。これは、「形のきれいな野菜があれば形のいびつな野菜もあって当たり前である」という考え方です。2つ目は「消費者の基準に生産者が合わせている」ということです。具体的には、見た目のよいものを購入したい、旬ではないものを食べたいなどといった消費者の需要に生産者が合わせることで、3つ目は「安心・安全を心がけている」ということです。有機農業では農薬を使用しない、農薬を使用する農業では農薬の使用ルールを守ることで、「安心・安全」に努めています。

それでは有機農業と農薬を使用する農業の2つの特徴について話します。有機農業の大きな特徴として生物に優しく、安心・安全、動物福祉が挙げられます。有機農業では、農薬を使用しないため、様々な生物がお互いに共存することが可能であり、安心・安全な作物を私たち消費者に提供することが出来ます。動物福祉の観点では多くの場合、先ほど紹介したような鶏の平飼いを行っています。家畜に与える苦痛を抑えることで家畜の治療費を軽減することができます。また、鶏の糞を肥料とし、畑から出た廃棄物を鶏の飼料にすることで循環農業となります。農薬を使用している農業の大きな特徴として、見た目が良い、大量生産出来る、安定した収入を得ることが出来るということが挙げられます。お互いに良いところがありますが、わたしたちはSDGsの観点から有機農業が持続可能な社会を形成するために必要だと考えました。

ほかに、消費者の意識を変えることが必要です。消費者が見た目や形で判断しない、旬のものを旬の時期に食べる、食品ロスをなくす、この3つのことを消費者が意識すれば、持続可能な社会の実現につながります。

次に私たち、商業生視点からヒト、モノ、カネ、情報、について考えてみました。私たちが積極的に見た目や形の悪い農作物を使った料理などの情報を発信していくことで、消費者の見た目や形の悪い商品に対する意識改革につながり、それらの商品の需要が高くなります。そうすることでお金になり経済が循環し、生産者の方々はさらに質の良い農作物が作れるようになっていきます。例えば、多気町にあるVISONは三重県で採れた食材を使用したお店が多くある日本最大級のリゾート施設で、SDGsに積極的に取り組んでいます。体験を通してSDGsについて理解を深め貢献することができます。そして産直市場や魅力的なお店がたくさんあるので、県外から来る方も多くいるため、影響力があります。また、VISONは、多気町、大紀町、明和町、度会町、大台町、紀北町と連携しています。最先端のシステムを使用しているため、そのノウハウを連携している地域に展開することで地域活性化につながります。

最後に私たちが好きな食べ物を食べ続けるためには、農業を続けていけるような環境を守らなければなりません。その為に私たちの行動を見直し、できることを考え、積極的に行動することが大切です。以上で発表を終わります。

### 3 成果発表会

本事業をはじめとする今年度の本校の取組について学習成果発表会をオンラインにより開催した。本校生徒・教職員のほか、コンソーシアム委員、学校関係者が参加し、代表生徒のべ34名（司会生徒を含む）が授業や課外活動など、この1年間の取組について発表した。また、第2部においては「SDGsを達成するために」をテーマにパネルディスカッションを実施した。

日時 令和4年1月31日(月) 13:10~15:30  
場所 宇治山田商業高等学校 各HR教室



#### プログラム

- 13:10~13:15 開会あいさつ [司会]2-5 中村矢真葉、濱口桜子
- 13:15~14:35 第1部
- ・国内研修 A コース 2-3 中村心美、2-4 佐々木佑華、2-5 小坂晴南、濱口えま
  - ・国内研修 B コース 2-1 米満陽人、2-2 濱口凜桜、三浦琳、2-5 濱口桜子、溝口琴葉
  - ・国内研修 C コース 2-2 三宅羽繰、2-3 浦口涼太、前田裕美
  - ・国内研修 D コース 2-4 浦田奈波、橋本美音、山本妃星々、2-5 櫻井美晴
  - ・みえグローバル学生大使活動 2-5 小坂晴南、1-4 北川美桜、中田真緒、山路結生
  - ・3年ビジネス情報管理 3-4 奥田くるみ、前百萌子
  - ・課題研究「観光とビジネス」3-2 山下真光亜、山本悠斗、3-5 堤心那、松井亜由奈、山本朝日
  - ・英語スピーチコンテスト 3-1 菌部暁里、3-5 山村涼真
- 14:45~15:25 第2部 パネルディスカッション テーマ「SDGsを達成するために」
- コーディネーター 東北大学大学院環境科学研究科 三橋正枝 (本事業カリキュラム開発専門家)
- パネラー 日本経済大学 准教授 高見啓一 (本事業運営指導委員長)
- 伊勢市情報戦略局 局長 須崎充博 (本事業コンソーシアム委員)
- 東北大学大学院教育研究科 准教授 劉 靖 (特別ゲスト SDGs推進支援協力者)
- 本校生徒代表 3-5 竹田裕喜、大門絵美、2-3 沖見舞花
- 15:25~15:30 講評・閉会



#### 生徒の感想

- ・私自身も課題研究で SDGs のことに関して色々学んで知っていたつもりだったけど今日の研修の報告などを聞いてまだまだ理解出来ていなかったし、もっと理解する必要があるってそれを自分だけでなく周りを巻き込んで広げていく必要があるということ学びました。(3年生)
- ・一人一人が SDGs についての当事者意識を持つことがとても大切だということが分かりました。私も実際、高校に入学して SDGs についていろいろ学んできたけど、ちゃんと考えて行動していたかと言われると少し微妙なところはあります。だからこれからは、当事者意識を持つことを大切にしていきたいし、マイボトルやマイバッグ、マイ箸を持参するなど小さなことから一つずつ続けていきたいと思いました。(2年生)
- ・自分が知らないところで山商の生徒は色々な活動に参加していることに尊敬の気持ちと自分も参加したい意欲がでました。2年生になったら、自分も SDGs に関連する場所へ行き、その現地の人の話を聞いたり、SDGs の対策案を考えて達成に向けて少しでも貢献したいと思った。(1年生)

(1) 国内研修Aコース

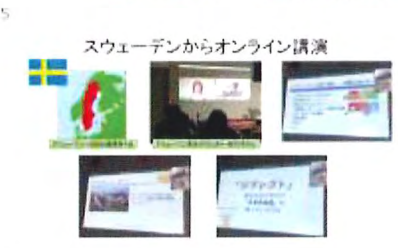
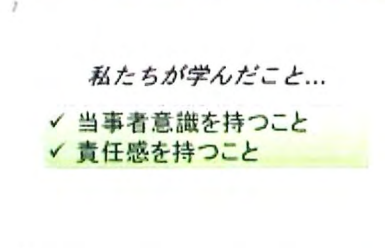
SDGsの観点から学ぶ  
復興とグリーンリカバリー

- 2年3組中村心菜
- 2年4組侍々下佑華
- 2年5組小坂晴南
- 2年6組渡口えま



研究の目的

1. SDGsの観点から、復興とグリーンリカバリーに関する知識を身につけ、その重要性や取組の意義を学ぶ。
2. 留学生や現地の高校生との交流を通して、異見交換を行ない視野の拡大と未来社会的意識を養う。
3. 東北県の防災対策を学び、其々の地域の防災対策に生かす。



私たちが学んだこと...

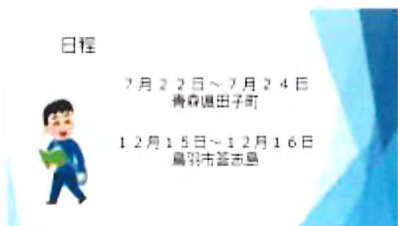
- ✓ 当事者意識を持つこと
- ✓ 責任感を持つこと

私たちがこれからやっていくこと...

- ✓ 伊勢志摩の未利用資源を使い、この地域の活性化を目指すグループに積極的に関わります!



(2) 国内研修Bコース



学んだこと

- 播てることを当たり前にしない。
- 地方創生には新鮮な視点が不可欠。
- アイデアを形にしてみる。





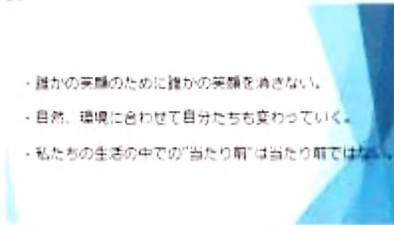
10



11

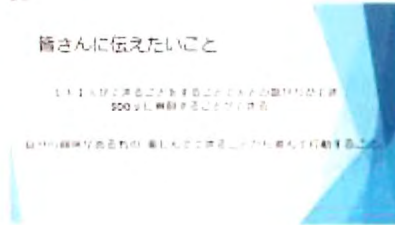


12



13

- ・誰かの笑顔のために誰かの笑顔が消さない。
- ・自然、環境に合わせて自分たちも変わっていく。
- ・私たちの生活の中での“当たり前”は当たり前ではない。



14

皆さんに伝えたいこと

1. 1人だけやることよりみんなでやることの方がいい  
500人に賛同することから始める

2. 自分から率先行動するもの、楽しんでもいいし、やらせて行動させること



15

(3) 国内研修Cコース

SDGs推進まちづくり

三宅羽輝 浦口涼太 前田裕美  
WVA 佐々木先生 結城先生

1

みへいでいるプロジェクト まとめ

- 1 捨てる前に一度何か再利用できないか考える
- 2 地元の魅力を知る
- 3 地産地消について考える



4

沖永良部島ってどんなところ？



2

むらさきほうしゃくみんな喜ぶ！プロジェクト

- ・自転車から自転車
- ・健康問題
- ・サイクリング体験



5

みへいでいる「ありがとう」プロジェクト



3

むらさきほうしゃくプロジェクト まとめ

- 1 自転車の活用を推進する
- 2 温室効果ガスの削減
- 3 町の活性化



6

伊勢志摩では...



7

沖永良部高校との交流

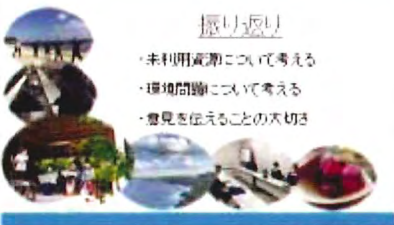


8

環境問題



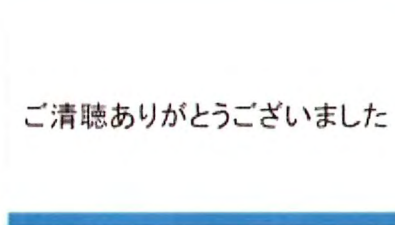
9



10

振り返り

- ・未利用資源について考える
- ・環境問題について考える
- ・意見を伝えることの大切さ



11

ご清聴ありがとうございました

(4) 国内研修Dコース (「第6節 4」に掲載)



(5) みえグローバル学生大使活動

1

みえグローバル学生大使の活動について  
"Yamasho ESS Club"

2

「みえグローバル学生大使」とは？

- 三重県内で国際的な活動を組織的に行う高校生・大学生が三重県に申請し、知事から委嘱される。
- 県が行うイベントや国際的な活動への参加 三重県の紹介やPRを行う。

★ ESS委員は、「Yamasho ESS Club」の団体のことで2019年9月に社団に委託された。

3

今年度の活動

- SNS（Instagram）を利用した三重県の紹介
- 太平洋・島サミットに関する交流活動


4

SNS（Instagram）を利用した三重県の魅力紹介

5

投稿について

- 一週間に一回
- 外国人観光客や日本に在住する外国人へ向けて三重県の魅力を投稿



6



7

Follow us on Instagram!  
@yamasho\_global



8

太平洋・島サミットに関する交流活動

9

活動  
グローバル学生大使  
オンライン交流会

10

食文化

11




12

伝統的な料理



13

食の欧米化



14

食の欧米化



15



16



17

教育

18



19

【解決策】



20



21



# 海洋プラスチックごみ

22

ごみの削減のためにやっていること

【レジ袋禁止令】

23

【イギリス】 【フランス】

【バングラデシュ】 【パプアニューギニア】

24

ごみの現状

26

ごみの削減のためにやっていること

【清掃活動】 【資源回収】

27

私たちができること

一人ひとりが自分の行動に責任をもって協力する意思を持つこと

28

THANK YOU FOR LISTENING.

“Yamasho ESS Club”

## (6) 3年ビジネス情報管理「海洋ごみ削減を目指して」

1

— 海洋ごみ削減を目指して

千葉県立平谷山形高等学校  
校長 金子 貴之

2

海洋ごみの現状

世界の伊勢湾では 年間約7800トンのプラスチックごみ

3

なぜ海洋ごみを削減していかなければならないのか

海洋ごみの削減 → 資源物の価格の上昇 → 廃棄物の削減 → 廃棄物の減量 → 暮らしの生活に影響

4

個人で取り組める活動

3R

リサイクル  
リデュース  
リユース

5

リサイクル 再利用する

リデュース 使用量を減らす

リユース 繰り返し使う

6

87.5%

削減率：海洋プラスチックごみ

7

銚子川河口ゴミひろい

8

清掃活動の様子

9

ごみの削減で得た成果

10

活動の様子

11

WEBサイトの制作

目的：海洋ごみ削減に関する情報を発信し、市民の意識向上を図る

12

気を付けたこと

- 見やすさ
- 正確さ
- 権利



13

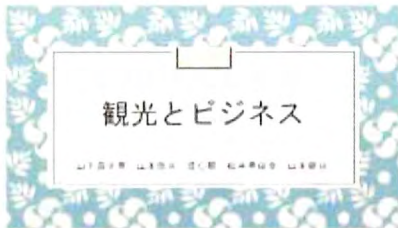


14

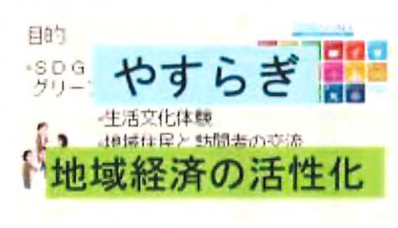


15

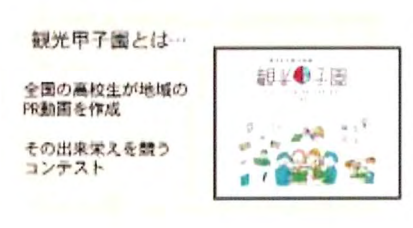
(7) 課題研究「観光とビジネス」



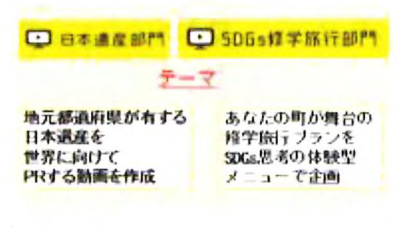
1



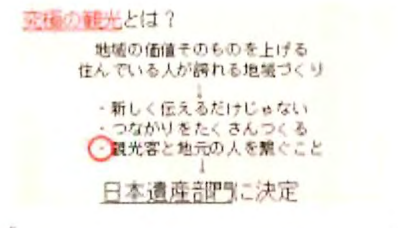
2



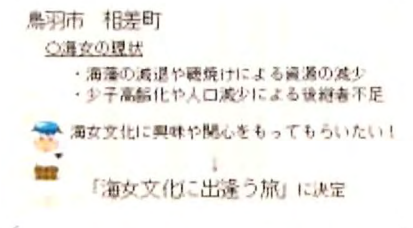
3



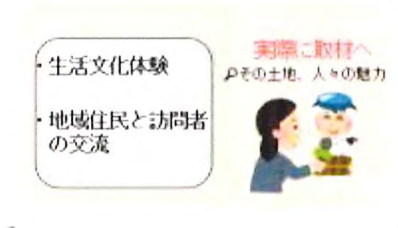
4



5



6



7



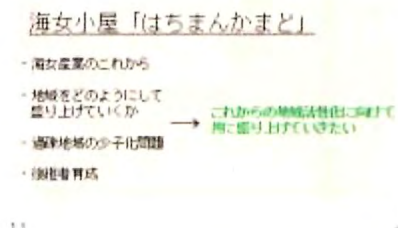
8



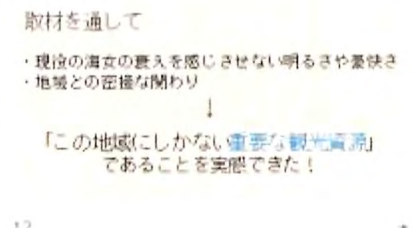
9



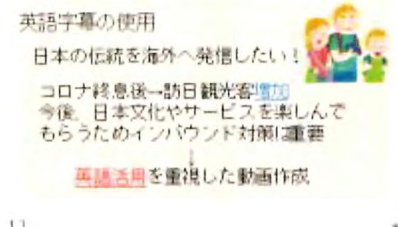
10



11



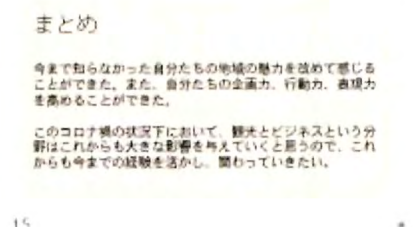
12



13



14



15

# 第8節 効果の測定

## 1 三菱UFJリサーチ結果

三菱UFJリサーチ&コンサルティング(株)の評価ツール「高校魅力化評価システム」を用いて、学校地域における生徒の教育環境や生徒の成長を見える化し、授業・指導の改善や、地域との協働のあり方について検討した。

本校の診断結果は以下の通りである。

対象生徒：全校生徒（1年156名、2年197名、3年196名）  
調査実施日：令和3年10月25日～29日

### Portfolio of sustainable education and community

高校魅力化評価システム 組織診断プラットフォーム

高校名 三重県立宇治山田高等学校

年度 2021年度

回者数	生徒	549	(内訳)	1年生	156	2年生	197	3年生	196	4年生	0	5年生	0
	(平均)	591	(内訳)	157	200	3年生	194	4年生	0	5年生	0		
六人	26	(内訳)	職員	26	(内訳)	職員	42						

【MEMO】  
教育目標、育てたい生徒像など

### Summary 総括表

■ 前年度、前々年度からの肯定的回答割合の推移 (まとめ)

項目	前年度	前々年度	今年度
1. 学習活動	72.0%	71.0%	74.0%
2. 学習環境	65.5%	65.1%	68.4%
3. 生徒の自己認識	74.0%	73.0%	74.0%
4. 生徒の行動実践	77.0%	76.0%	77.0%

■ 1. 学習活動 (肯定的回答割合、下段の数値が平均値)

主体性	協働性	探究性	社会性
72.0%	66.3%	63.3%	63.3%
71.0%	70.0%	68.0%	68.0%
74.0%	73.0%	74.0%	74.0%

■ 2. 学習環境 (学びの土壌・非形式的学びコミュニティ)

主体性	協働性	探究性	社会性
62.2%	60.3%	61.4%	61.4%
60.3%	63.0%	63.7%	63.7%
64.6%	64.6%	64.6%	64.6%

■ 3. 生徒の自己認識 (真実・能力の発揮)

主体性	協働性	探究性	社会性
74.0%	73.0%	74.0%	74.0%
73.0%	73.0%	73.0%	73.0%
74.0%	73.0%	74.0%	74.0%

■ 4. 生徒の行動実践 (真実・能力の発揮)

主体性	協働性	探究性	社会性
77.0%	76.0%	77.0%	77.0%
76.0%	76.0%	76.0%	76.0%
77.0%	76.0%	77.0%	77.0%

### How to read 結果の読み取り方

このプラットフォームでは、以下の5側面、4領域、3軸により、高校と地域の学びの「いま」と「変化」を読み取ることができます。

5つの側面を  
→ 各側・領域の対照表、「学習環境」「生徒の自己認識」「生徒の行動実践」「協働性」の4つの学習・探究に関する項目に分けています。  
4つの領域から  
→ 各領域を「主体性」「協働性」「探究性」「社会性」(社会性)に分類しています。  
3つの軸で  
→ 上記データを「時間軸(前年度からの伸び)」「学年軸(学年による違い)」「地域軸(地域との比較)」の3つの軸で整理しています。

結果に出ている数字や言葉は次の意味を表しています。

【割合(%)】  
→ 割合で「4. あてはまる」[3. どちらかはいはばはまる]という肯定的回答をした割合  
【地域軸】  
→ 同じ学年・領域に属する他校との比較  
【回答上昇者の割合】  
→ (個人IDで紐づけを行い、継続回答を記録した生徒の割合) 前年と比較して、各領域の回答平均値が上がった回答者の、回答者数に占める割合

■ 読み・伸ばししろ  
読み：前年度回答者の個人IDを  
伸ばししろ：前年度回答者が個人IDを  
伸びしろ：前年度回答者が個人IDを  
伸びしろ：前年度回答者が個人IDを

① 学習活動  
72.0% 前年度、学習環境について前年度と比較し  
72.0% 前年度、学習環境について前年度と比較し  
72.0% 前年度、学習環境について前年度と比較し

② 学習環境  
65.5% 前年度、学習環境について前年度と比較し  
65.5% 前年度、学習環境について前年度と比較し  
65.5% 前年度、学習環境について前年度と比較し

③ 生徒の自己認識  
74.0% 前年度、生徒の自己認識について前年度と比較し  
74.0% 前年度、生徒の自己認識について前年度と比較し  
74.0% 前年度、生徒の自己認識について前年度と比較し

④ 生徒の行動実践  
77.0% 前年度、生徒の行動実践について前年度と比較し  
77.0% 前年度、生徒の行動実践について前年度と比較し  
77.0% 前年度、生徒の行動実践について前年度と比較し

■ 3. 生徒の自己認識 (真実・能力の発揮)

■ 4. 生徒の行動実践 (真実・能力の発揮)

■ 前年度、前々年度からの肯定的回答割合の推移 (まとめ)

■ 1. 学習活動 (肯定的回答割合、下段の数値が平均値)

■ 2. 学習環境 (学びの土壌・非形式的学びコミュニティ)

■ 3. 生徒の自己認識 (真実・能力の発揮)

■ 4. 生徒の行動実践 (真実・能力の発揮)

【生徒の自己認識】読み取り・検討の視点  
・ 普段から意識している、育てたい生徒像や、身につけさせたい力に調音する指標の結果は？  
・ 前年からの変化は？その原因として、何が考えられますか？(学習環境、学習環境と関係付けて)  
・ 今後、意識して伸ばしていきたいと考えられる力は？そのために必要な「次の一手」は？

【生徒の行動実践】読み取り・検討の視点  
・ 生徒に期待する具体的な行動は？  
・ 生徒の自己認識との関係は？  
・ 具体的な行動を促すような、学習環境や学習環境づくりはできているか？

## 2 AiGROW分析結果

AiGROWは、360度コンピテンシー評価とAI（人工知能）の活用によって、個人の資質と能力および各教育活動の教育効果を可視化・定量化する評価ツールである。

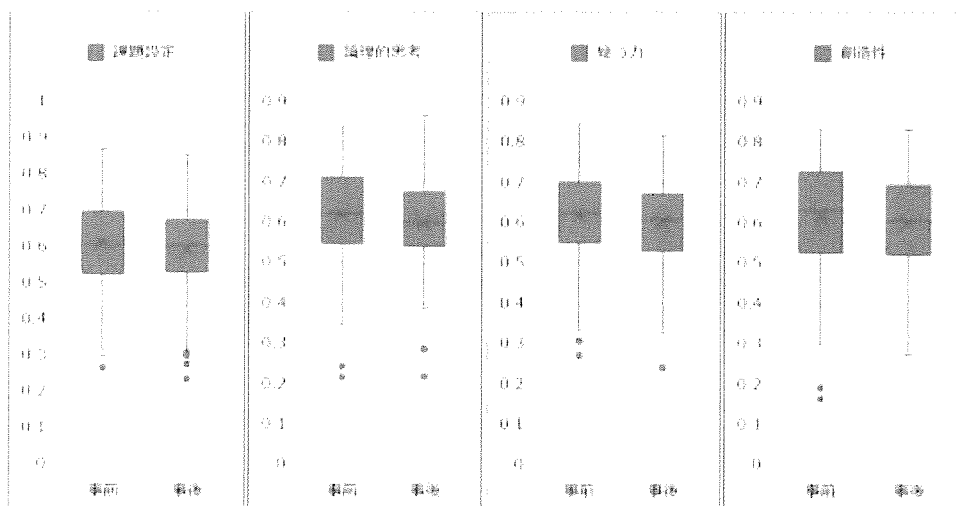
本事業においては、2019年度入学生を対象として入学年次から調査を継続実施してきた。今年度の生徒の資質・能力の伸びを把握するとともに、3年間の受検結果と比較することによって、事業における各種プログラムの効果を検証することとした。

### (1) 調査設計

項目	内容
調査目的	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の効果検証
調査対象	三重県立宇治山田商業高等学校 3年生 173名
調査期間	事前受検：令和3年7月20日（火）～令和3年7月28日（水） 事後受検：令和4年1月5日（水）～令和4年1月8日（土）
調査項目	以下の20コンピテンシー <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 認知系：課題設定、論理的思考、疑う力、創造性</li> <li>■ 自己系：個人的実行力、自己効力、耐性、決断力</li> <li>■ 他者系：表現力、共感・傾聴力、柔軟性、影響力の行使</li> <li>■ コミュニティ系：地球市民</li> <li>■ その他：主体性（個人的実行力×決断力）、協働性（自己効力×影響力の行使）、リーダーシップ（主体性×協働性）、イノベーション（課題設定×柔軟性）、批判的思考力（疑う力×表現力）、創造的思考力（創造性×共感・傾聴力）、協働的思考力（耐性×共感・傾聴力）</li> </ul> ※本事業のキー・コンピテンシーは、上記のコンピテンシーを以下のように代替して調査 <b>【地球市民力】</b> (1) 課題解決力 → 課題設定 (2) 論理的思考力 → 論理的思考 (3) 地域への貢献力 → 地球市民 <b>【未来創造力】</b> (1) 企画力 → イノベーション (2) 調整力 → 協働性 (3) 実践力 → 個人的実行力 (4) 突破力 → 決断力 (5) 創造力 → 創造性
調査方法	Institution for a Global Society 株式会社が開発した「Ai GROW」を用いた潜在的な気質診断とコンピテンシー評価（360度評価）のスコアを基に調査。 気質診断：iATを用いたBig5（内向性⇔外向性、保守性⇔開放性、繊細性⇔平穏性、独立性⇔協調性、自律性⇔自由性）診断

### (2) 今年度のコンピテンシーの成長

#### ア 認知系コンピテンシー



■基本統計量

時期	課題設定			論理的思考			疑う力			創造性		
	事前	事後	変化	事前	事後	変化	事前	事後	変化	事前	事後	変化
平均値	0.608	0.591	-0.017	0.619	0.600	-0.019	0.620	0.601	-0.018	0.615	0.600	-0.015
標準偏差	0.126	0.114	-0.002	0.121	0.113	-0.008	0.109	0.110	0.001	0.131	0.129	0.012
最小値	0.265	0.233	-0.032	0.214	0.216	0.002	0.270	0.240	-0.030	0.163	0.273	0.110
中央値	0.606	0.602	-0.004	0.621	0.599	-0.023	0.621	0.608	-0.015	0.632	0.606	-0.025
最大値	0.869	0.850	-0.019	0.837	0.864	0.027	0.843	0.816	-0.028	0.833	0.830	-0.002

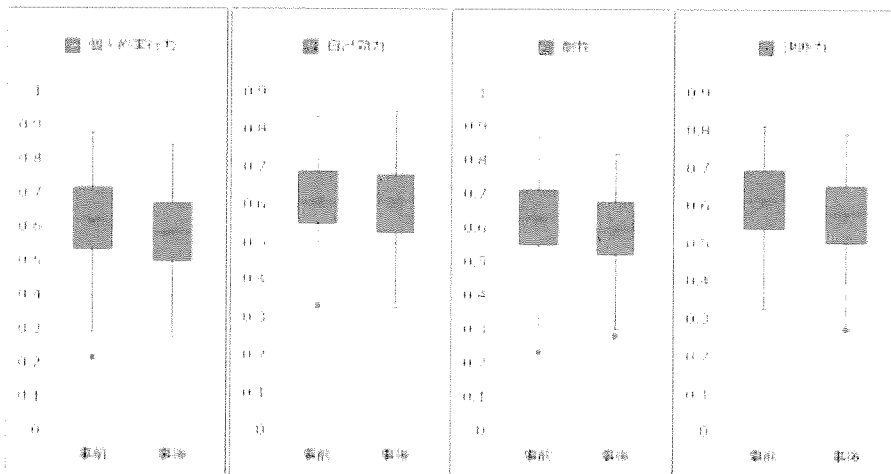
<他校\*との比較>

- 課題設定：最大値以外全国平均を上回る。特に最小値と中央値が大きく上回っている。
- 論理的思考：最大値以外全国平均を上回る。特に標準偏差の低さと平均値の高さが際立つ。
- 疑う力：最大値以外全国平均を上回る。特に最小値が大きく上回っている。
- 創造性：最大値以外全国平均を上回る。標準編の低さに加え平均値と中央値の高さが際立つ。

※全国の「Ai GROW」導入校の生徒から5,000名の中高生を無作為に抽出

中央値で見るとやや落ちているが、標準偏差はいずれもポジティブに変化（疑う力は変化なし）しており、特に創造性の最小値が大幅上昇。これにより標準偏差も大きく変化した。進学校含め多くの学校で課題となっており（特に標準偏差の数値が大きい）、昨年度の課題の一つとなった創造性の成長に一定の効果が認められる。

イ 自己系コンピテンシー



■基本統計量

時期	個人的実行力			自己効力			耐性			決断力		
	事前	事後	変化	事前	事後	変化	事前	事後	変化	事前	事後	変化
平均値	0.616	0.583	-0.033	0.607	0.605	-0.002	0.624	0.591	-0.031	0.609	0.577	-0.031
標準偏差	0.128	0.126	-0.002	0.104	0.110	0.006	0.111	0.114	0.003	0.106	0.116	0.009
最小値	0.215	0.274	0.059	0.332	0.325	-0.007	0.233	0.281	0.049	0.125	0.270	-0.056
中央値	0.620	0.584	-0.037	0.605	0.611	0.005	0.628	0.596	-0.032	0.615	0.579	-0.036
最大値	0.879	0.844	-0.034	0.833	0.850	0.017	0.869	0.817	-0.052	0.810	0.791	-0.019

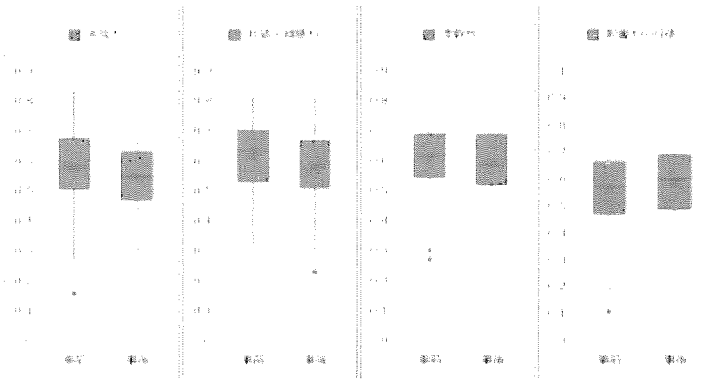
<他校\*との比較>

- 個人的実行力：全国平均との比較で特に最小値と標準偏差が大きく上回っている。
- 自己効力：最大値以外全国平均を上回る。特に標準偏差と最小値と中央値が顕著である。
- 耐性：最大値以外全国平均を上回る。特に最小値の高さが顕著である。
- 決断力：全国平均並み。その中で最小値が高く下位層が少ないのが特徴。

※全国の「Ai GROW」導入校の生徒から5,000名の中高生を無作為に抽出

最小値が他の能力に比べ低かった個人的実行力と耐性のスコアが大幅上昇。また、本実証事業で大きな成長が認められていた自己効力もさらに成長している。唯一、課題といえるのは決断力。最小値、平均値、中央値ともにスコアが大きく下がった。

ウ 他者系コンピテンシー



■基本統計量

項目	表現力			共感・傾聴力			柔軟性			影響力の行使		
	事前	事後	変化	事前	事後	変化	事前	事後	変化	事前	事後	変化
平均値	0.580	0.547	-0.032	0.613	0.579	-0.034	0.608	0.592	-0.015	0.559	0.582	0.023
標準偏差	0.119	0.118	-0.001	0.118	0.117	-0.001	0.106	0.112	0.006	0.148	0.144	-0.004
最大値	0.157	0.250	0.093	0.299	0.229	-0.069	0.269	0.279	0.010	0.167	0.176	0.070
中央値	0.583	0.547	-0.036	0.634	0.581	-0.052	0.616	0.588	-0.028	0.569	0.601	0.032
最小値	0.829	0.845	0.015	0.812	0.824	0.012	0.835	0.818	-0.017	0.865	0.844	-0.021

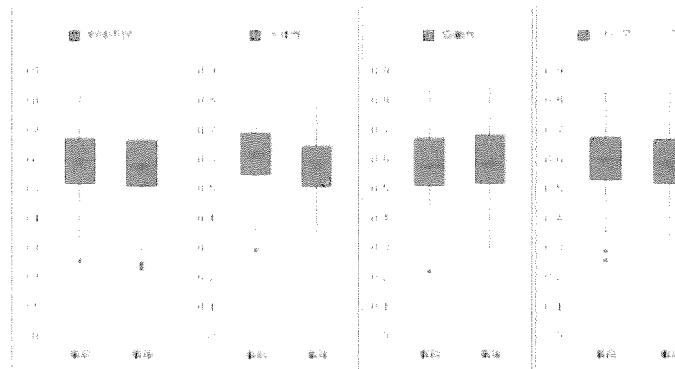
<他校\*との比較>

- 表現力：平均値や中央値は全国平均並み。一方、標準編と最小値は全国平均を大きく上回る。
- 共感・傾聴力：標準編と最小値は全国平均を大きく上回るが、それ以外は全国平均を下回る。
- 柔軟性：最大値以外全国平均を上回る。特に最小値と平均値が大きく上回っている。
- 影響力の行使：最大値以外全国平均を上回る。中でも平均値と中央値の高さが際立つ。

※全国の「Ai GROW」導入校の生徒から5,000名の中高生を無作為に抽出

多くの能力で最小値が上昇。一方、平均値と中央値で見ると多くの能力でスコアが下がっているが、影響力の行使は最大値以外、スコアが大幅に上昇している。協働性の構成要素でありながら多くの学校でもっとも課題になっている能力を、短期間でこれだけ大幅に成長させられたのは大きな成果といえる。

エ コミュニティ系・その他のコンピテンシー



■基本統計量

項目	地球市民			主体性			協働性			リーダーシップ		
	事前	事後	変化	事前	事後	変化	事前	事後	変化	事前	事後	変化
平均値	0.526	0.577	0.050	0.611	0.577	-0.034	0.581	0.594	0.011	0.598	0.586	-0.012
標準偏差	0.115	0.117	0.001	0.107	0.112	0.006	0.113	0.113	0.000	0.100	0.108	0.007
最大値	0.275	0.228	-0.047	0.292	0.291	0.000	0.219	0.161	-0.057	0.257	0.308	0.052
中央値	0.600	0.581	-0.019	0.617	0.591	-0.026	0.577	0.586	0.008	0.598	0.589	-0.009
最小値	0.813	0.817	0.004	0.835	0.816	-0.019	0.813	0.841	0.028	0.825	0.828	0.003

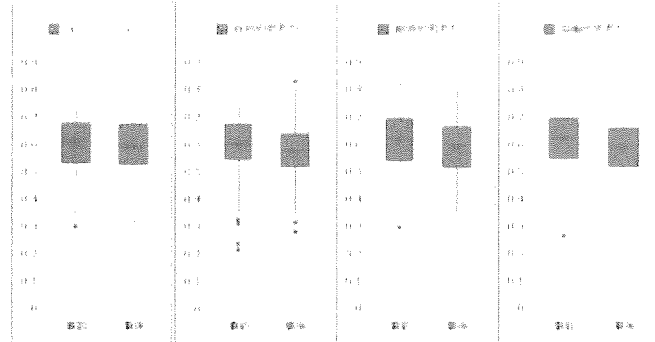
<他校\*との比較>

- 地球市民：最大値以外全国平均を上回る。特に最小値と平均値が大きく上回っている。
- 主体性：最小値以外全国平均を下回る。一方、最小値は全国平均を大きく上回っている。
- 協働性：最大値以外全国平均を上回る。特に標準偏差と平均値が大きく上回っている。
- リーダーシップ：全て全国平均を上回る。特に標準偏差と中央値が顕著である。

※全国の「Ai GROW」導入校の生徒から5,000名の中高生を無作為に抽出

主体性がやや下がってしまった要因の一つとして主体性の構成要素の一つである決断力の低下が考えられる。一方、協働性は全ての項目でポジティブな変化が認められた。これは協働性の構成要素の一つである影響力の行使の大幅な成長が要因となっている。前述の通り、影響力の行使は多くの学校で課題となっている能力の一つとなっており、これだけの成長を支えた本事業内における活動を特定することで、他校にも波及可能な協働性を育む取り組みを明確化することができるのではないだろうか。

### オ その他のコンピテンシー



### ■ 基本統計量

時期	イノベーション			批判的思考力			創造的思考力			協働的思考力		
	事前	事後	変化	事前	事後	変化	事前	事後	変化	事前	事後	変化
平均値	0.608	0.592	-0.005	0.600	0.574	-0.025	0.614	0.590	-0.024	0.619	0.586	-0.033
標準偏差	0.099	0.104	-0.014	0.103	0.105	0.001	0.107	0.105	-0.002	0.100	0.106	0.006
最大値	0.300	0.286	-0.021	0.213	0.280	0.066	0.296	0.342	0.046	0.266	0.266	0.000
最小値	0.611	0.590	0.013	0.600	0.579	0.021	0.623	0.595	0.028	0.623	0.592	0.031
中央値	0.808	0.821	0.013	0.821	0.830	0.010	0.822	0.815	-0.008	0.824	0.803	-0.021

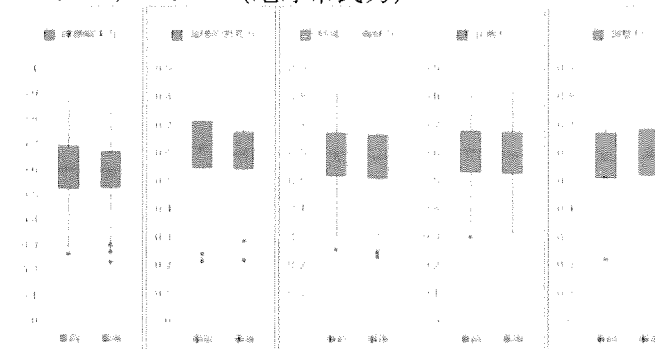
### <他校※との比較>

- イノベーション：全て全国平均を上回る。特に最小値と中央値が大きく上回っている。
- 批判的思考力：全て全国平均を上回る。特に最小値が大きく上回っている。
- 創造的思考力：最大値以外全国平均を上回る。特に最小値と平均値が大きく上回っている。
- 協働的思考力：最大値以外全国平均を上回る。特に最小値と標準偏差が顕著である。

※全国の「Ai GROW」導入校の生徒から5,000名の中高生を無作為に抽出

イノベーションは中央値の他、最大値も上昇。3つの思考力（批判的思考力、創造的思考力、協働的思考力）のうち、批判的思考力と創造的思考力は最小値が大幅に上昇した。元々、下位層は少なかったが、さらに底上げができた印象。

### カ 本事業のキー・コンピテンシー（地球市民力）



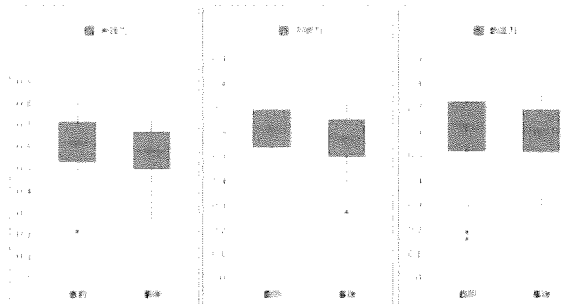
### ■ 基本統計量

時期	問題解決力			協働的思考力			批判的思考力			創造的思考力			決断力		
	事前	事後	変化	事前	事後	変化	事前	事後	変化	事前	事後	変化	事前	事後	変化
平均値	0.609	0.591	-0.017	0.619	0.620	0.001	0.586	0.577	-0.009	0.608	0.592	-0.016	0.583	0.594	0.011
標準偏差	0.116	0.114	-0.002	0.121	0.113	-0.008	0.116	0.117	0.001	0.099	0.104	0.005	0.113	0.111	-0.002
最大値	0.285	0.233	-0.052	0.214	0.216	0.002	0.255	0.228	-0.027	0.300	0.286	-0.014	0.219	0.301	0.082
最小値	0.626	0.607	-0.019	0.621	0.599	-0.022	0.600	0.581	-0.019	0.611	0.590	-0.021	0.577	0.588	0.011
中央値	0.859	0.850	-0.009	0.837	0.864	0.027	0.813	0.817	0.004	0.808	0.821	0.013	0.831	0.841	0.010



いずれも3年間の実証事業で大きく伸ばしてきた能力で伸びしろを考えると難しいが、論理的思考、調整力は下位層を減らし底上げを図りながら上位層も伸ばせている。中でも調整力の成長が顕著である。

キ 本事業のキー・コンピテンシー（未来創造力）



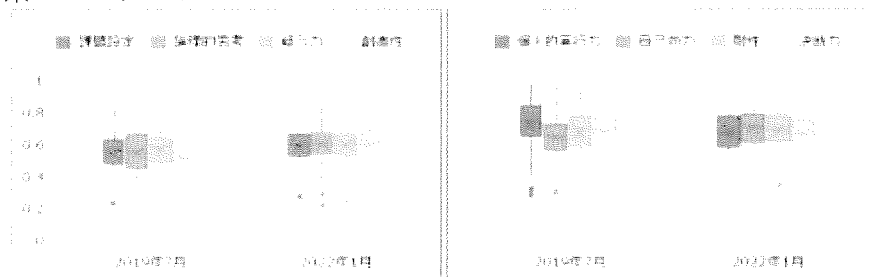
■基本統計量

階層	判断力			実践力			創造力		
	事前	事後	変化	事前	事後	変化	事前	事後	変化
上位層	0.616	0.583	-0.033	0.609	0.572	-0.037	0.615	0.600	-0.015
標準偏差	0.128	0.126	-0.002	0.106	0.116	0.009	0.131	0.119	-0.012
中位層	0.215	0.274	0.059	0.325	0.270	-0.056	0.163	0.273	0.110
標準偏差	0.020	0.084	0.037	0.015	0.029	0.036	0.032	0.066	0.025
下位層	0.879	0.844	-0.034	0.810	0.791	-0.019	0.833	0.830	-0.002

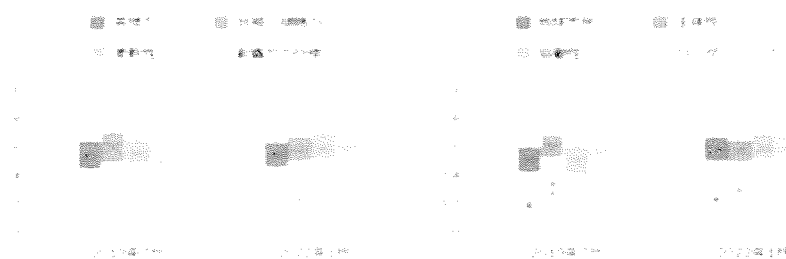
前述の通り、決断力の低下によって突破力は低下。一方、実践力と創造力については、下位層を中心にポジティブな成長が認められ、全体的に底上げができていているといえる。

(3) 3年間（令和元年度～令和3年度）のコンピテンシーの成長まとめ

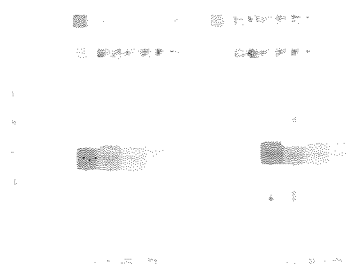
■認知系・自己系コンピテンシー



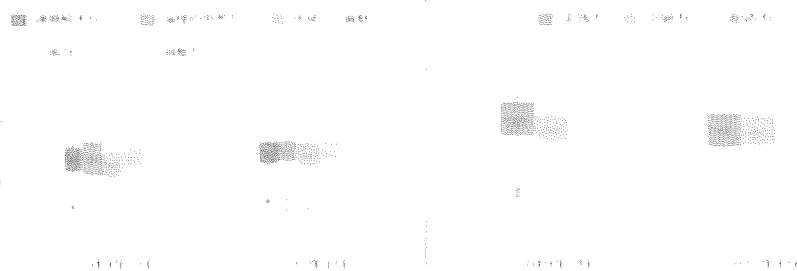
■他者系・コミュニティ系・その他のコンピテンシー



■その他のコンピテンシー



## ■本事業のキー・コンピテンシー



3年間の本事業の効果を明らかにするため、2019年7月（初回受検）と2022年1月（通算7回目の受検）の「Ai GROW」受検結果（平均値）を基にt検定を実施した。

分野	コンピテンシー	2019年7月	2022年1月	差	有意水準（両側）
認知系	課題設定	0.556	0.591	0.03**	0.06
	論理的思考	0.553	0.600	0.05**	0.12
	疑う力	0.570	0.602	0.03**	0.00
	創造性	0.503	0.600	0.10**	0.00
自己系	個人的実行力	0.628	0.583	-0.05**	0.03
	自己効力	0.554	0.606	0.05**	0.03
	耐性	0.584	0.593	0.01	0.62
	決断力	0.586	0.573	-0.01	0.00
他者系	表現力	0.544	0.548	0.00	0.01
	共感・傾聴力	0.604	0.580	-0.02	0.03
	柔軟性	0.564	0.593	0.03*	0.04
	影響力の行使	0.476	0.583	0.11**	0.00
コミュニティ系	地球市民	0.513	0.577	0.06**	0.40
その他	主体性	0.607	0.578	-0.03*	0.00
	協働性	0.515	0.594	0.08**	0.00
	リーダーシップ	0.561	0.586	0.02*	0.00
	イノベーション	0.560	0.592	0.03*	0.03
	批判的思考力	0.557	0.575	0.02	0.00
	創造的思考力	0.554	0.590	0.04**	0.00
	協働的思考力	0.594	0.587	-0.01	0.13
地球市民力	課題解決力	0.556	0.591	0.03**	0.06
	論理的思考力	0.553	0.600	0.05**	0.12
	地域への貢献力	0.513	0.577	0.06**	0.40
	企画力	0.560	0.592	0.03**	0.03
	調整力	0.515	0.594	0.08**	0.00
未来創造力	実践力	0.628	0.583	-0.05**	0.03
	突破力	0.586	0.573	-0.01	0.00
	創造力	0.503	0.600	0.10**	0.00

\*\*p<0.01, \* p<0.05

27 コンピテンシー中 19 コンピテンシー（全体の約7割）の成長に有意性が認められた。また、本事業のキー・コンピテンシーの成長については、実践力と突破力以外に有意性が認められた。実践力については3年間通じての課題となった一方、イノベーションにつながる課題解決力や企画力には特に大きな成長が認められるなど、3年間にわたる本事業の教育効果は大きいといえる。

## 第9節 運営指導委員会報告

### 第1回運営指導委員会

日時：令和3年6月1日（火）15時30分～17時

場所：宇治山田商業高等学校 他（Zoomにて）

参加者（敬称略）

委員長	関係者
日本経済大学准教授 高見 啓一	宇治山田商業高等学校長 廣島 朗
副委員長	宇治山田商業高等学校教頭 北尾 健
株式会社アーリー・バード代表取締役 三田 泰久	宇治山田商業高等学校事務長 溝口 克志
委員	宇治山田商業高等学校教諭（事業担当者） 守屋 宏美
IGS株式会社執行役員教育事業部事業部長 矢部 一成	三重県教育委員会事務局高校教育課指導主事 上村 峰生
三重県雇用経済部国際戦略課長 北川 雅敏	
三重県教育委員会事務局高校教育課長 井上 珠美	

司会：北尾教頭

#### 1 あいさつ

宇治山田商業高等学校長 廣島 朗  
三重県教育委員会事務局高校教育課長 井上 珠美（代理 西川 俊朗）

#### 2 委員自己紹介

司会：三田副委員長

#### 3 協議事項

(1) 2020年度 研究開発実施状況報告について（別紙様式3 研究開発完了報告書）  
→守屋より説明

(2) 2021年度 研究開発実施計画について（別紙様式1 研究開発実施計画書）

① SDGs推進プログラムの開発

② 観光都市を描くプログラムの開発

→守屋より説明 資料「海外研修の国内研修への代替について」

③ 効果測定の開発・検証

意見

- ・事業指定後も継続していくための仕組みづくりが必要だ。
- ・今やっていることが社会ではどのように使えるかを生徒たち意識させると良い。
- ・目標設定シートにある「職場定着率」の調査は今後も継続実施してほしい。
- ・「SDGsと観光」と学校計画の絡みについて検討してほしい。

### 第2回運営指導委員会

日時：令和4年3月2日（水）10時00分～11時30分

場所：宇治山田商業高等学校 他（Zoomにて）

参加者（敬称略）

委員長	関係者
日本経済大学准教授 高見 啓一	宇治山田商業高等学校長 廣島 朗
副委員長	宇治山田商業高等学校教頭 北尾 健
株式会社アーリー・バード代表取締役 三田 泰久	宇治山田商業高等学校事務長 溝口 克志
委員	宇治山田商業高等学校教諭（事業担当者） 守屋 宏美
IGS株式会社執行役員教育事業部事業部長 矢部 一成	三重県教育委員会事務局高校教育課指導主事 上村 峰生
三重県雇用経済部国際戦略課長 北川 雅敏	
三重県教育委員会事務局高校教育課長 井上 珠美	

協議事項

(1) 2021年度 研究開発実施状況について

(2) 次年度以降の取組について

## 第10節 グローカル人材育成コンソーシアムみえ報告

### 第1回グローバル人材育成コンソーシアムみえ

日時：令和3年7月5日(月)15時～16時

場所：宇治山田商業高等学校会議室

伊勢市情報戦略局長	須崎 充博	伊勢農業協同組合経営企画部長	河井 英利
UL Japan人事総務部長代理	福村 伝史	海女小屋はちまんかまど代表取締役	野村 一弘
皇學館大学文学部コミュニケーション学科教授	豊住 誠		
三重県教育委員会事務局高校教育課長	井上 珠美	三重県教育委員会事務局高校教育課指導主事	上村 峰生

宇治山田商業高等学校長	廣島 朗	教頭	北尾 健		
教諭	守屋宏美	福井竜一郎	岡村咲良	山口和昭	児玉靖明
	田中秀和	佐々木崇	結城正浩	奥野純	

#### 報告事項

(1) 2020年度 研究開発実施状況報告(別紙様式3「研究開発完了報告書」)

#### 協議事項

(1) 2021年度 研究開発実施計画(別紙様式1 研究開発実施計画書)

① 海外研修の国内研修への代替について

② 商業科目「課題研究」における取組について

③ 商業科目「ビジネス情報管理」における取組について

コロナウイルス感染拡大に伴い海外研修を中止することとし、その代替として当初の海外研修の目的を達成できるような国内研修を計画したことについて説明した。また、商業科目「課題研究」や「ビジネス情報管理」における地域との取組について意見交換を行った。

### 第2回グローバル人材育成コンソーシアムみえ

日時：令和3年12月9日(木)16:00～17:00

場所：宇治山田商業高等学校会議室

#### 協議事項

(1) グローバルワークショップ

「SDGs推進プログラム」及び「観光都市を描くプログラム」について、代表生徒がこれまでの取組と今後の計画について中間報告し、意見交換を行った。

① Aコースより

1 研究テーマ

「SDGsの観点から学ぶ復興とグリーンリカバリー」

2 目的

- ・SDGsの観点から、復興とグリーンリカバリーに関する知識を身につけ、その重要性や取組の意義を学ぶ。
- ・留学生や現地の高校生との交流を通じて、意見交換を行ない視野の拡大と未来社会創造意識を養う。
- ・東松島市の防災対策を学び、我々の地域の防災対策に生かす。

3 研究内容

・東北大学での講義

「地方創生とSDGs」「リン循環」「資源環境の現状と課題」

「『ZEB』－新環境エネルギーシステム構築－」

「未利用資源量の最小化とグリーンジョブマーケット」

・東北大学大学院留学生との交流

・石巻西高校との交流

・防災施設「KIBOTCHA」見学

・東松島市震災復興伝承館見学

・エコツアー体験(嵯峨溪遊覧船体験、宮城オルレ奥松島散策)

・東松島市防災拠点備蓄倉庫見学

4 研修を通して学んだこと

東北大学においては、SDGsに関連した専門的な学習を教授陣から学ぶことができ、多くの知識を得ることができた。

同じ文科省事業指定校である石巻西高校との交流では、生徒同士が互いの取組から学び

つつ親交を深めることができた。

東松島市でのフィールドワークでは、東日本大震災後にどのように市が復興を遂げたのか、また、震災の経験を活かした先進的な防災の取組等を学ぶことができた。

#### 5 今後の抱負

もっと環境について知り、一人ひとりが身近な問題としてとらえ、これから私たちに何ができるのかを考えていく必要性を感じた。研修を終えて学んだことを、私たちが全校生徒に還元することから今後の私たちの歩みを進めていきたい。

### ② Bコースより

#### 1 研究テーマ

「観光都市 with SDGs ～伊勢志摩！未来創造プロジェクト～」

#### 2 目的

伊勢志摩同様に都市部から離れた地域における地方創生に資する取組（地域の自然資源を生かしたグリーンツーリズムの体験と自然との関わり方等）を学ぶ。

#### 3 研修内容

訪問場所 タブコブ創遊村（青森県田子町）

- ・タブコブ創遊村 散策
- ・レザークラフト
- ・イベント企画提案のWS

#### 4 研修を通して学んだこと

研修を通して、「協力」と「当たり前は当たり前では無い」ということを学びました。

まず「協力」についてです。散策をした時 タブコブ創遊村を毎日整備されている方、サービスを提供する代わりに草刈りをしてもらう、さらに人手不足や高齢化により出来なくなった茅葺き屋根の張り替えをクラウドファンディングにより集めて行っていると伺いました。今あるものを大切にしている方がいるからこそ何年先も変わらぬものを残すことができるのだと感じました。サービス・草刈りのように無形のもので人と繋がり 相互扶助している点も、気持ちで繋がり合うことで より良いモノと共により良い関係をつくれると思いました。1人ではできないけれど、同じ思いを持つ誰かがいれば出来る。そう考えるとやはり協力の良さを改めて学び直すことが出来ました。

次に、「当たり前は当たり前では無い」ことについてです。レザークラフトにて、元々は捨てられていた 未利用の牛の革を使って ものづくりをさせていただきました。捨てられていたモノとは思えないほどしっかりしていて、色の綺麗な革だったので、「これが捨てられていたのか」と率直に感じました。この体験から無駄なものはないと思いました。固定的な概念により「捨てるのが当たり前」となっていたけれど、可能性が秘められているのを実は知らないだけ でした。これから「捨てる」のでは無く、「どうしたらいいのか」「何に変えられるのか」を日常の中で少しずつ考えて行きたいと思いました。

#### 5 今後の抱負

12月15日、16日にかけて 鳥羽にある海島遊民くらぶ さんに伺ってグリーンツーリズムを企画運営する側の視点を見学する機会を頂きました。自然と地域活性化を掛け合わせた海島遊民くらぶさんの運営の裏側を見学し、企画運営する上での大切なこと大変なことなどを学んでいきたいと考えています。これらの学びからマネジメント力やコミュニケーション力といった社会に出てから重要とされるもののスキルを身につけたらなと思っています。企画運営は顧客の方にはどうすれば 満足してもらえるか、どうすれば人が集まるのかと細かいことを練って考え生み出さなければいいモノは出来ません。今までサービスを受けていた側だったけれど、企画側に立ち 新しい視点を見つけ出せたらいいなと思っています。

### ③ Cコースより

#### 1 研究テーマ

「SDGs 推進まちづくりと地域の自然を生かしたグリーンツーリズムの研究」

#### 2 目的

SDGs の理念に基づいた、自然資源を生かしたグリーンツーリズムなどを利用し、地方創生を目指した取り組みを学ぶ

#### 3 研修内容

##### (ア) 実施場所

鹿児島県 沖永良部島

##### (イ) 実施日

令和3年11月10日（水）～11月13日（土）

(ウ) 内 容

- ① 鹿児島県和泊町役場にて「みへでいるプロジェクト」に参加
- ② oldie-village (オールディヴィレッジ) による自然体験
- ③ 鹿児島県和泊町役場にて「むうるほうらしゃプロジェクト」に参加
- ④ 島内サイクリング
- ⑤ 鹿児島県立沖永良部高等学校との交流

4 研修を通して学んだこと

和泊町の総合振興計画会議のプロジェクトに参加し、地産地消の大切さを学びました。会議内では、私達の発言も役場の方々が真剣に聞いて下さり、提案した案(島バナナを乾燥させてチップスにする)についてすぐに試作品を作って下さり大変嬉しく思いました。自然体験においては、最近のニュースにもなっている軽石問題についても触れることができました。沖永良部島は、自然に囲まれて景観も素晴らしいのに対し、島の方々の移動はほぼ自動車であることから、自転車活用推進の会議にも参加させてもらい、また実際サイクリングも行い、感じたことを報告させてもらいました。研修全体を通して島の人たちの温かさをとて感じました。自然の良さを維持することは決して簡単なことではないことを学びました。環境を守っていくために様々な方が関わって、アイデアを出し合う大切さを学びました。

5 今後の抱負

今回参加して、今後はもっと地域の活動に参加しようと思います。私の住んでいるところは、近くに海もあるし山もあります。ゴミ拾いなどの活動もきっとあると思います。住んでいる地域の課題に今一度向き合いたいと思います。

④ Dコースより

1 研究テーマ

「オーガニック(有機農業)とSDGs」

2 目的

好きな食べ物を食べ続けるために私達にできることは何かを知るため

3 研究内容

- ・有機農業とSDGsとの関わり
- ・動物福祉
- ・有機農業の課題
- ・消費者の有機農業に対する考え

4 研修を通して学んだこと

- ・有機農業は農作物と生き物に配慮し、「共存・循環・持続」が可能な農業  
→動物がストレスフリーに過ごせる環境 ex) 鶏の平飼い  
農薬を使わないから土壌の生態系が守られて生物多様性につながる  
農薬による健康被害や学習障害

- ・有機農業は環境を破壊しない

- ・日本の有機農業に対する「偏見・意識の低さ」 →日本人の固定概念 ex) 見た目重視

- ・有機農業の担い手

→農業体験 ex) 海外からの研修生の受け入れ

5 今後の抱負

- ・私達が学んだことを多くの人に伝えたい

→人間と同じように野菜もそれぞれ違って当たり前であるということ

- ・オーガニックを積極的に生活に取り入れる→買う人を増やすためにどうすべきか考える

- ・有機農業を広める

→若者を中心に発信していく

- ・農薬による健康被害や学習障害の関係について調べる

第3回グローバル人材育成コンソーシアムみえ

日時：令和4年2月21日(月)15:40~16:40

場所：宇治山田商業高等学校 他 (Zoomにて)

協議事項

(1) 2021年度の取組について

本年度の取組について振り返り、意見交換を行った。また、SDGsと観光をテーマにした探究的な学びが浸透していることを共有した。

(2) 2022年度以降の取組について

次年度以降の官民や高等教育機関関係者による継続支援を依頼した。また、今後の具体的な取組案について助言をもらった。

2019年度指定 地域との協働による  
高等学校教育改革推進事業（グローバル型）  
研究報告書・第3年次

令和4年3月発行

発行者 三重県立宇治山田商業高等学校  
〒516-0018 三重県伊勢市黒瀬町 1193  
TEL 0596-22-1101 FAX 0596-22-4624  
HP <http://www.mie-c.ed.jp/cujiya/>